

編集後記

第22回リハビリテーション医学会総会は先月、盛大に開催された。高橋教授をはじめ学会の運営に当たられた独協医大リハ科のスタッフの皆様は厚く御礼申し上げます。年々、内容も充実してきていることは喜びにたえない。

我が国のリハビリテーションの発展の鍵を握っているともいえる本学会の責任は大きい。そのためには、巻頭言にて、眞野氏が指摘されているように、科学性を深める場として真のリハビリテーション科学の確立をめざし会員の方々とともに奮闘したいものである。

本号の特集は“四肢麻痺”である。これは本誌でも、創刊以来、多くの面よりこれに関連したことは採り上げられて来た。しかし、今後解釈されねばならない残された課題は山積みされている。今回はこの障害を各診療科の立場の違いにより、考え方に多少の相異があるので、この点に焦点をしばらく編集した。

伊藤氏他はリハ医の立場より論じられているが、特に観血的治療に対して鋭く問題を指摘されている。興味深く読ませて頂いた。新

宮氏は整形外科の立場より、急性期の脊椎脊髄治療の問題を中心に、病理学的研究成果を交え論じられている。岩坪氏他は泌尿器科の立場より、豊富な臨床経験より論じられ、井沢氏は小児療育の立場から、成人のものとは異なる面を有することを指摘されている。いずれも、長年にわたる臨床経験ならびに研究成果がにじみでている力作であり、学ぶ点が多い。厚く御礼申し上げます。

研究と報告、短報なども有意義なお仕事であり、今後の研究の御発展をお祈りしたい。講座は、沢浦氏が臨床上、しばしば遭遇する肝機能障害について、林氏がリハビリテーション医療にたずさわる者として、必須な基本的な持つべき知識である骨・軟骨損傷の回復過程について、分かり易く解説をして頂いた。

本号も読みごたえのある号として読者の皆様におとどけすることができた。歳月のたつのは真に早く、1985年も半ばを過ぎ、間もなく梅雨も終り、夏に入る。気候不順の折から御自愛をお祈りしつつ編集後記とする。

(緒方 甫)

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
河 邨 文 一 郎
五 味 重 春
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
岩 倉 博 光
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
奥 川 幸 子
加 倉 井 周 一
小 島 蓉 子
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 橋 勇
高 松 鶴 吉
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
土 肥 豊
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
長 谷 川 恒 雄
初 山 泰 弘
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
米 本 恭 三
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)

次号予告(第13巻 第8号)

特 集	リハビリテーション看護	
	リハビリテーション看護の理想と	
	現実……………遠賀浅木内科病院	三 好 正 堂
	総合病院におけるリハビリテーション看護:	
	行動科学的アプローチ……………神奈川リハセンター	大 橋 正 洋
	病院から地域へ: 看護の立場から見た	
	脳卒中患者の退院指導……………伊豆通信病院	諸 伏 悦 子・他
	頸髄損傷患者のリハビリテーション看護……………国療村山病院	小 川 英 子・他
	脳性麻痺児に対する看護婦の役割……………高知県子鹿園	江 口 寿 榮 夫・他
	慢性関節リウマチに対するリハビリ	
	テーション看護……………自治医大	石 堂 洋 子
	呼吸器疾患のリハビリテーションに	
	おける看護……………国療東京病院	伴 内 勝 子・他
巻 頭 言	難病との出会い……………国療徳島病院	松 家 豊
研究と報告	脳卒中片麻痺の歩行能力における到達水準の	
	予測: 一般病院における成績……………中伊豆リハセンター	窪 田 俊 夫・他
症 例 報 告	Respiratory Quadriplegia に対する	
	舌咽呼吸訓練の1例……………太田総合病院整形外科	平 泉 裕・他
紹 介	フランスにおける言語治療 (orthophonic)	
	の現況……………弘前大・神経精神科	渡 辺 俊 三・他
講 座	リハビリテーション医に必要な全身管理	
	(8) 糖尿病の管理と運動療法……………川崎医大	土 肥 信 之・他
	機能修復	
	(4) 筋結合組織障害の機能回復……………岡大・整形外科	井 上 一
一 頁 講 座	義肢のパーツ (8) 義手の手先具……………兵庫リハセンター	中 島 咲 哉